

「家族の素敵 な作り方」

匿名希望

三十余年前、高校の交換留学でアメリカのシアトルに、一年間ホームステイをした。ホストファミリーは、若い夫婦と二人の娘がいる家庭で、カラフルなペットのオウムも一羽いた。

家族は四人とも肌の色が違っていた。アフリカ系のお父さんの肌は闇夜のような黒、ドイツ系のお母さんの肌はピンクがかった白。二人の娘はどちらも養子で、メキシコから来た長女の肌は明るい褐色、韓国から来た次女の肌色は、日本人の私とよく似ていた。

アメリカで養子はめずらしくないとは聞いていたものの、まだ小学生と幼稚園児のホストシスターたちが、「わたしは養子なの！」と元気に自己紹介する様子に、私は面食らった。なんと言っているのかわからない。ずいぶん後になってから、「それは素敵だね」と言えばよかったのだと後悔した。

夫婦は養子を迎えるとき、その子に事前に会ったり、写真で顔を見ることはしなかったという。いざ迎えてみて、期待したような子じゃなかったらどうしようって不安じゃなかったの？と思わず聞くと、夫婦は顔を見合わせて笑った。二人は口を揃えて、「家族になったから愛しているわけじゃない。愛すると先に決めて家族になったのだ」と言った。びっくりした。強いし、カッコいいと思った。

最近、四十歳になった次女が結婚した。相手は女性のパートナーだそうだし、かも、もうすぐ女の子の養子を迎える予定だという。「それはすごく素敵だね」と、今度は間髪入れずに私は言った。